



甲斐千香子、ステップス2年ぶり2回目の個展である。初個展の時には大きな屏風をギャラリー内に展示したが、今回は「双六」という主題を全面に出してインスタレーション的展開を図った。

甲斐によると観葉植物を集めることによって、消費という物欲について考える動機となった。その執着点と終着点をこの作品で表わしたかったという。「物欲」といっても作品がグロテスクな訳では決しない。

しかしこの軽やかな作品の中に、人間の欲望がヒタ隠しになっていることは確かなようだ。甲斐がどのように考えているか定かではないが、私から見た甲斐の「欲望」は、悪意だけではなく、人間そのままの姿でもある。

それは楽しいという享楽、綺麗だなあという恍惚、このままでいたいという奔放が含まれていても、何も「悪意」や「背理」に塗れていないということの意味する。「道徳」とは常に恣意的な存在であり、気にする必要はない。

さてインスタレーションだが、画像のように、ギャラリー中央に双六が置かれていて、壁面にぐるりと作品が飾られている。作品は観葉植物だけで占められているのではなく、普段の生活や抽象的表現も多く含まれる。

双六にサイコロはなく、サイコロがないのであればどのように遊べばいいのかというと、双六にサイコロは必要ないと考えればいだけである。それがまた、このインスタレーションの特徴ともなっている。

立ち会う者は双六という「物語」に気にすることなく、自由に作品を解釈して楽しむことができる。リアリズム絵画ではないが、中途半端で曖昧な作品ではない。その作品を、自己の想像力の翼を広げて飛ばせばいい。

それは、甲斐の制作態度にも同様ではないかと感じる。甲斐の主題は明瞭だが、作品は無意識で描いている気がする。考えるのではなく勝手に手を動かし、見て直していくのではなく心のそのままを描いているのが魅力だと思う。

